

新書紹介

エントロピーの法則

ジュレミー・リフキン著 竹内均訳

祥伝社 A5判 二八六頁 一四〇〇円

エントロピーの法則とは、

「物質とエネルギーは一つの方
向のみに、すなわち使用可能な
ものから、使用不可能なもの
へ、あるいは利用可能なものか
ら、利用不可能なものへ、ある
いは秩序化されたものから、無
秩序化されたものへ変化する」
という熱力学の第二法則のこと
を指す。アインシュタインは、
いみじくも「エントロピーの法
則はすべての科学にとっての第
一法則である」と述べている。

著者J・リフキンは、この言
葉を丹念に跡づけていくよう
に、地球上（特にアメリカ）で
人類が直面している諸問題に対
し、エントロピーの法則を用い
るにより説明を試みてい
る。

エントロピーとは、利用可能
なエネルギーが利用不可能な形
態に変化していく度合を測る測
定法であり、この本でたびたび
使用される「エントロピーの増
大」とは、すなわち地球上が混
沌と荒廃へ向っていることを意
味する。

現在、人類はローマクラブの
提言を待つまでもなく、多くの
困難な問題を抱えているが、わ
れわれが常日頃、不安を感じて
いる資源・エネルギー、環境破
壊、食糧危機、人口爆発等の問
題について、著者リフキンは、
「エントロピーの法則」によ
り、極めて論旨明解な結論を導
き出す。その手並はあざやかで
あり、リフキンがカーター大統
領のブレインとして、アメリカ

の経済政策に参画していたこと
を考え合わせると、現代に生き
るわれわれとしては、暗澹たる
気分には陥らざるをえない。

「エントロピーの法則」は、
われわれが単純に信じて止まな
かった「歴史は進歩する」とい
う概念を完全に打ち砕き、地球
の将来について、われわれの主
体的な選択を迫る。

このリフキンの警告に対し
て、人類の叡知を信じる人から
の反論もあろう。しかし、リフ
キンの説によれば、過去に人類
が直面した問題の解決法は、当
面する問題の解決を、後の世代
に肩代わりさせたに過ぎないこ
とになる。この本の読後感が、
大変悲観的になってしまふの
は、この本がそれだけ説得力を
持っているからに他ならない。

また、注意しなければならな
いことは、エントロピーの増大
による地球の崩壊がいつ来るか
は誰も予測できないことだ。著
者の指摘にもあるが、過去のエ
ネルギー環境の変化は、その転
換に数百年かかったこともあ
り、われわれはエネルギー環境
は緩やかに変化すると思ひこみ

がちである。しかし、現在の社
会的・経済的システムの下で
は、高資源・高エネルギーの投
資が不可避であり、地球が途方
もない大崩壊に見舞われても、
少しも不思議ではないのだ。

エントロピーの法則を読者が
信じようと、信じまいと、この
本から二つの教訓を得ることが
できると思う。一つは、われわ
れ現代人の生活は、過去からの
因果の流れに規定されており、
われわれ自身、次世代への継承
を考慮しながら生活していかな
ばならないこと。もう一つは、
エントロピーの増大という宿命
の中で、われわれは自ら主体的
に生きること、内面的生活を充
実することを目標に生きていか
なければならぬということであ
る。エントロピーの増大のカ
ーブを緩やかに保ちながら生き
ていくためには、エントロピー
の影響から比較的自由的な、精神
の問題に、われわれの関心を向
けざるをえないのだ。物や情報
の過剰にともなうエントロピー
は増大していくが、これに反
比例して、人間の精神的充足感
は失われてゆく。物質やエネル

ギーに大きく依存した生活や、
欲望を刺激する産業で成り立つ
社会から、われわれの精神的自
由を取り戻すことが、生を充実
した、輝きを持つものにする道
なのではないだろうか。

この文章の最後を、エントロ
ピーの増大とはほとんど無縁だ
った中世と現代について述べた
次の言葉で締めくくられるのも、満
更無駄なことではなからう。

「幸福が、生活の快適さによ
るのであれば、中世に生きた私
たちの祖先は、現代人より不幸
であったといえよう。しかし、
もし幸福が生と対峙する態度に
よるのであれば、超俗的な信念
をもっていたあの時代の人びと
は、現代人以上に幸福感を、少
なくとも内的な安らぎと心の安
定も持っていたものと思われ
る」(J・ドーケール「中世ヨ
ーロッパの生活」)。

〈企画財政局企画調整室

佐藤信二